

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

カナダ極北圏ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の共同管理について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001796

カナダ極北圏ヌナヴィク地域におけるシロイルカ 資源の共同管理について

岸上伸啓
国立民族学博物館

1 はじめに：問題の所在	止・警告事項
2 シロイルカの生態と資源としての重要性	3.2 2001-2003年の共同管理体制
2.1 シロイルカの生態	3.3 2002年のシロイルカの共同管理の変更
2.2 食料としての重要性	3.4 イヌイットの対応
2.3 シロイルカの社会・文化的な重要性	4 ヌナヴィク地域における共同管理の問題点と提案
3 ヌナヴィク地域におけるシロイルカの共同管理の変遷と現状	4.1 共同管理の問題点
3.1 1996-2000年のシロイルカの共同管理体制	4.2 ヌナヴィク地域における資源管理の可能性
3.1.1 捕獲頭数の割り当て制	4.3 ヌナヴィク地域における共同管理形態の再検討
3.1.2 シロイルカの禁猟区の設定と禁	5 結びにかえて

1 はじめに：問題の所在

資源問題に関する人類学的研究（資源人類学と呼んでおきたい）の目的のひとつは、地球環境を破壊することなく、多様な資源を人類が将来も持続して利用するためにはどのような方策や選択肢があるかを調査し、提言することである（岸上 1999: 73; 2001: 29）。特定の資源の有用性は地域や文化、時代によって異なるため、特定の資源問題を十分に理解するためには、その資源自体の生態的な条件とそれを利用する側の文化や社会の条件を研究することが不可欠である（秋道 1997: 168）。そのためには各地域におけるさまざまな資源の利用や管理の実態を調査することが必要となる。

カナダ極北地域においては、海洋資源はカナダ政府の管轄であり、その管理もカナダ政府によって行われてきた。しかしイヌイットの諸権益に関する最初の協定となった「ジェームズ湾および北ケベック協定」が1975年にカナダ政府とヌナヴィク・イヌイットとの間で締結されると、資源管理のやり方に関して転機が訪れた。その後、徐々にではあったが、イヌイットが食料とするような動物の管理は、カナダ政府が主導する管理に代わって、カナダ政府と資源の利用者であるイヌイットによる共同管理（co-management）が行われるようになった（岸上 2001; 岩崎 2002; 大村 2002a）。

本稿ではカナダ極北地域のイヌイットが食料資源としている回遊性動物シロイルカに焦点を当て、シロイルカを食料資源として持続的に利用していくために実施されている共同管理について考えてみたい。すなわち、カナダのヌナヴィク (Nunavik) 地域におけるシロイルカ資源の利用と共同管理について紹介し、その問題点を指摘する¹⁾。そのうえでシロイルカを「コモンズ」(commons)、すなわち共有資源とみる立場をとり、シロイルカ資源の管理のあり方についてこれまでの人類学的研究のように問題を分析することだけに踏みとどまるのではなく、どのように管理すべきかについての一案を提示する。

2 シロイルカの生態と資源としての重要性

2.1 シロイルカの生態

北アメリカの極北沿岸地域の海中に生息しているシロイルカは小型のクジラであり、ベルガクジラ (Beluga Whale) やシロクジラ (White Whale) と呼ばれている。イヌイット名はヒ (キ) ラルガク (*qilalugak*) で、学名は *Delphinapterus leucas* である。シロイルカの体長はオスで約 4 から 6m、メスで約 4m である (Graves and Hall 1988: 26)。そのオスの体重は最大で約 1,000kg、メスの体重は最大で約 700kg になる。シロイルカは 15 頭あまりからなる群 (グループ) を形成し、行動をともにする習性を持ち、季節的に回遊する。夏季から秋季にかけて数百頭からなる群を形成し、出産地と越冬地の間を移動することがある。

大型のシロイルカ 1 頭あたりからは約 200kg の肉、約 50kg のマツタック (脂肪付き皮部)、約 300 リットルの油 (脂肪) を取ることができる。カナダの極北沿岸に住むイヌイットは肉やマツタック、脂肪を食料として、脂肪 (油) を燃料として利用してきた。現時点では、カナダ西部極北地域やハドソン湾西岸地域のようにシロイルカが多数生息している地域もあるが、地域によっては生息数が少ないところもある。例えば、カナダのハドソン湾やウンガヴァ湾では 1850 年頃から 1900 年頃にかけてハドソン湾会社 (the Hudson's Bay Company) によって数千頭にもおよぶシロイルカが鯨油を取るといふ商業目的で捕獲され、個体総数が激減したことが知られている²⁾。ここでは、現在、シロイルカの商業捕獲は行われておらず、主にイヌイットによって食料資源として利用されているが³⁾、かつてのような資源量には回復していない。

ケベック州極北地域ヌナヴィクのイヌイットはマツタックを文化的に重要な食料として好み、夏から秋にかけてシロイルカを捕獲している。ヌナヴィク周辺には 3 つのシロイルカのグループ (東部ハドソン湾グループ、西部ハドソン湾グループ、ウンガヴァ湾グループ) が生息し、ハドソン海峡で越冬しているらしい。ヌナヴィク周辺ではかつての商業捕獲のためや現代の過剰捕獲のためにシロイルカの個体数が減少して

おり、漁業海洋省（Department of Fisheries and Oceans, 略称はDFO）は、ウングアヴァ湾および東部ハドソン湾のシロイルカのグループは頭数の上で危機の状態にあるとみなしている。このため、シロイルカを資源として持続的に利用するためには個体数の維持管理が必要であると漁業海洋省の担当者は考えているのである。

小型鯨類であるシロイルカは国際捕鯨委員会の規制を受けることはないが、1999年の時点でケベック州北部のヌナヴィク地域において資源管理が実施されている唯一の海棲哺乳動物である。

2.2 食料としての重要性

カナダ極北地域の先住民社会では1960年代以降、パンや缶詰食品、乾燥食品などが大量にカナダ南部から輸送され、消費されるようになってきた。食料の消費パターンは、若い世代のイヌイットの間では店で購入する食料品への依存度が高まり、狩猟や漁労への依存度が低下してきている（Thouez et al. 1989; Moffatt et al. 1994; Kuhnlein, et al. 2000）。しかしながらヌナヴィク地域の全体的な傾向として陸・海獣の肉や魚を中心とする伝統食（カントリー・フード）はイヌイットの重要な食料（特にタンパク質源）であり続けている（Santé Québec 1995; Wein et al. 1996）。

現在のアクリヴィク村では、その周辺地域に生息しているワモンアザラシ、アゴヒゲアザラシ、シロイルカ、セイウチ、ホッキョクグマ、カリブー、ホッキョクイワナ、

表1 アクリヴィク村の狩猟・漁労活動の1年（1999年現在）

	月（1年）											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
主な捕獲対象物												
ホッキョクイワナ	○	○	○	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○
淡水性ホッキョクイワナ	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎
ホワイト・フィッシュ	◎	◎	○	○	○	○				○	◎	◎
ワモンアザラシ	○	○	◎	◎	◎	○	○	○	○	◎	○	○
アゴヒゲアザラシ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○
シロイルカ							○	○	○	◎	◎	
セイウチ								○	○	◎		
ホッキョクグマ	◎	◎	○	○	○	○	○				◎	◎
カリブー	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○
ハクガン						○	○	○	○			
カナダガン				○	○	○	○	○				
カモ				○	○	○	○	○	○			
カモの卵						○						
ライチョウ	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○
ベリー類								○	○			

(注) 網掛けは中心的な捕獲物（食料）を示す。○は捕獲期、◎は捕獲の最盛期を示す。

コクチマス、湖に住む淡水性のホッキョクイワナ、ホワイト・フィッシュ、ライチョウ、カナダガン、ハクガン、カモ、鳥の卵、野イチゴ類、ウニ、海草類などの動植物を食料資源として利用している。それらの狩猟期や漁期は、表1に示す通りである。この中でシロイルカ、アゴヒゲアザラシ、セイウチ、ホッキョクグマ、カリブーは相対的に大型獣であるため、その肉やその他の部分は他のハンターや多数の村人に分配される。

アクリヴィク村のイヌイットの間では地元の生協で購入する食料品が食事の中にしめる比重が増大してきているが、アザラシやカリブーの肉、ホッキョクイワナなどの伝統食が主食であるといえる。アクリヴィク村では、他のイヌイットの村同様、シロイルカのマツタックは美味なる食料として珍重されており、イヌイットが好んで入手しようとする伝統食のひとつである。

2.3 シロイルカの社会・文化的な重要性

イヌイットの狩猟活動は「単なる経済活動ではなく、コミュニティとその大地・資源との間にみられる長期的な関係」(Hunn 1999: 30)に基づく活動である。シロイルカ猟もその例外ではない。狩猟を行うこと自体が、彼らの生活の一部である(例えば、Dahl 1989; Wenzel 1991)。

すでにフリーマンら(Freeman et al. 1998; 岩崎 2002)によってシロイルカ資源は極北先住民イヌイットやイヌヴィアルイットにとって高い価値をおく食料資源として、さらに社会・経済・文化的に重要な資源であることが指摘されている。ここでは資源の分配に着目して、その重要性を紹介する。

食料の分配には一種の扶助という経済的な機能がある。また、それにはイヌイット意識や社会的な連帯、社会関係を再生産させる効果がある(Kishigami 1995; 2000)。シロイルカのマツタックや肉は総量の多寡に関係なく、ハンターの親族やそれ以外の村人へと分配される⁴⁾。さらにそれらは食事や贈り物を通して繰り返し、分配されていく。この分配という社会的実践によって、分配が行われるネットワークの基になる社会関係が繰り返し利用され、その関係性が再確認され、社会関係が再生産されていくのである。特に、ハンター間関係、ハンターと彼らの親族、近所の者、友人、同名者、助産人との諸関係が食料資源の分配という実践によって再生産されている(Kishigami 1995; 2000)。

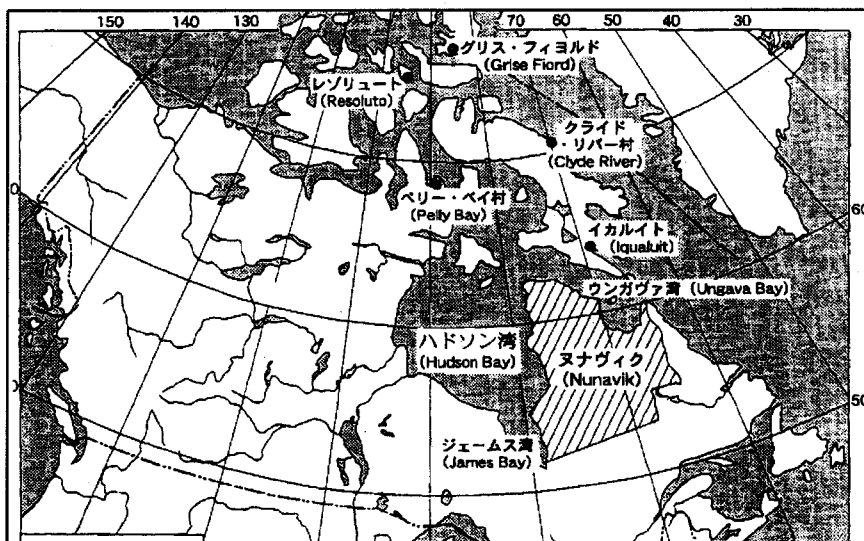
また、イヌイット流の獲物の分配は、相互に助け合うイヌイットという自覚と仲間意識を生み出す。先住民の諸権益に関してクリー、イヌイット、カナダ政府およびケベック州政府との間で締結された「ジェームズ湾および北ケベック協定」に基づいて創出されたハンター・サポート・プログラム⁵⁾による村全体での分配では、村人意識、村全体での助け合いの規範が確認され、維持、強化されているのである(岸上 1998;

Kishigami 2000)。

イヌイットをめぐる政治・経済状況が大きく変化した現在、食料資源の分配という実践は、困っている仲間を助けるという機能のみならず、社会関係や仲間意識（イヌイット意識）の再生産と深く関連している。このように見ると、イヌイットのシロイルカ猟とその獲物の分配は、経済的かつ、社会・文化的に重要な実践であるといえる。このような理由からもイヌイットにとってシロイルカ資源を、長期的な視野に立って持続的に利用していくことは重要な課題である。そこでその資源をいかに管理していくかという現実的な問題が存在するのである。

3 ヌナヴィク地域におけるシロイルカの共同管理の変遷と現状

資源の現状を知り、過剰捕獲を阻止し、かつ異なる村に住むイヌイットが資源をより公平に利用できるようにするために、北ケベック・イヌイットの政治・経済団体であるマキヴィク（Makivik Corporation）の調査部とカナダの漁業海洋省の職員、イヌイットのハンターはウングアヴァ湾とハドソン湾東岸においてシロイルカに関する調査を1984年に開始した。ヌナヴィク周辺のシロイルカの個体数、移動経路、生息地、出産場所、習性などを把握するために、シロイルカの生態に係わる民俗知識についてハンターからの聞き取り調査、頭数や群についての航空機を用いた調査、陸地からの定点観察、遺伝子分析⁶⁾、海域移動に関する遠距離計測器を利用した調査などが実施されてきた（Smith 2000a, b）。最近では、シロイルカを食べることによる人間の健康

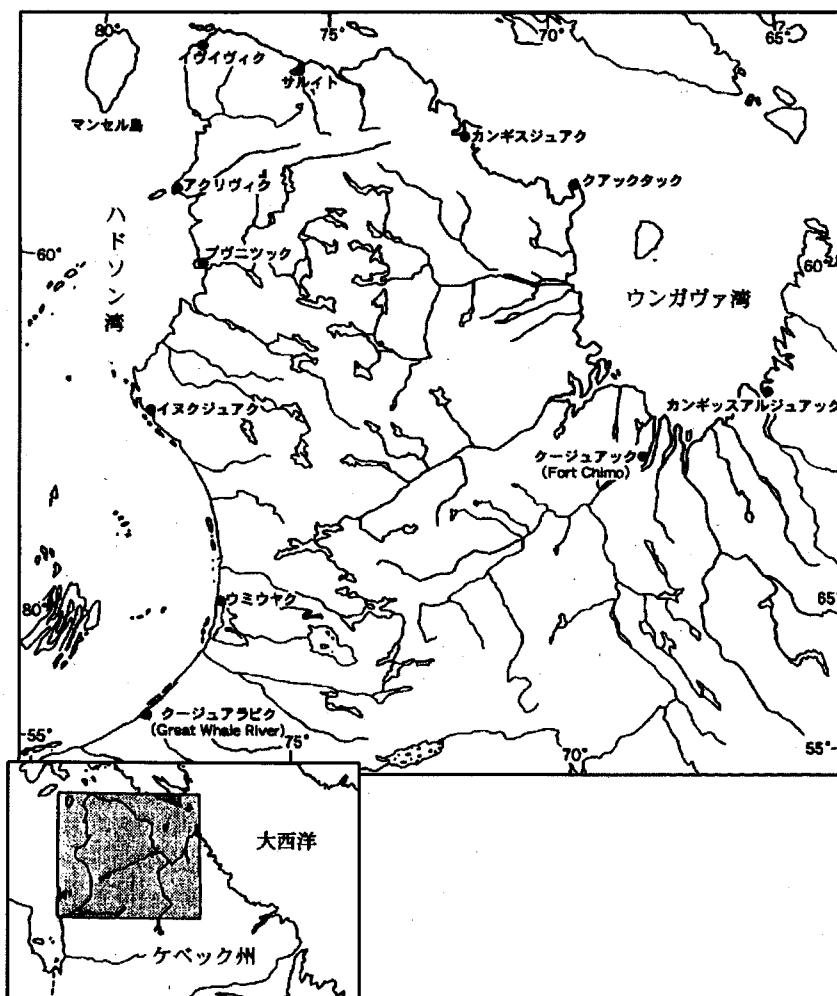


地図1 カナダ北極圏ヌナヴィク地域

への影響についての調査を、マキヴィクの調査部とカナダ政府の漁業海洋省の研究者が実施している (Kwan 2002-3)。

狩猟・漁労・ワナ猟調整委員会 (Hunting, Fishing and Trapping Coordinating Committee, 以下では調整委員会と呼ぶ) が、「ジェームズ湾および北ケベック協定」のもとで、狩猟・漁労・ワナ猟に関する諸策を決定し、実施するために創設された。この調整委員会は、先住民 (クリー, イヌイット, ナスカビ) 8人と政府関係者 (ケベック州政府とカナダ政府) 8人の計16人から構成されている。

調整委員会は、協定を結んだ先住民の生業活動全般について年に4回以上会合をもち、野生動植物資源の管理のための規則をつくりだす。また、関係政府に勧告を出し



地図2 ヌナヴィク地域にあるおもな村

たり、関係政府や先住民側に情報を伝達したりする。同委員会は、狩猟や漁労のライセンス、調査許可、狩猟権を与える力をもつ。法制度上は、関係政府と共同管理を実施する場合の一方の主体である。

この調整委員会のもとでヌナヴィク地域におけるシロイルカの管理が計画され、実施されてきた (Drolet, Reed, Breton and Berkes 1987)。最初に、漁業海洋省は一連の調査結果をもとに、シロイルカ資源の管理の必要性を主張した。そして管理制度を構築するために、マキヴィクとアングヴィガク (Anguvigak) という2つのイヌイト団体にアプローチした。マキヴィクは、「ジェームズ湾および北ケベック協定」に合意したイヌイトの政治・経済的な権益を代表する団体である。一方、アングヴィガクは、ヌナヴィク地域の狩猟・漁労・ワナ猟組合 (Hunting, Fishing, and Trapping Association, 略称はHFTA) である⁷⁾。

漁業海洋省とマキヴィク、狩猟・漁労・ワナ猟組合の代表者が話しあった結果、シロイルカを持続的に利用するためには科学的知識とイヌイトの知識を利用して保全を行うことが望ましいとの共通認識に達した。そして効果的な保全を実践するためには、地元のハンターが参加することが不可欠であることが指摘された。このため、漁業海洋省は、管理制度を考案する過程で、各村の狩猟・漁労・ワナ猟組合の協力を得て、地元のハンターを参加させた。このようにして作成された原案は、シロイルカのメスを捕獲しないこと、ハンティング・ロス (銃弾は獲物に命中したが回収できないこと) を防ぐために、捕獲手段や方法を規制すること、出産や生育の場所を守るために保護区を創出することなどが盛り込まれていた。なお、この原案については、各村の合意と狩猟・漁労・ワナ猟組合の決議によって、正式に同意が成立し、調整委員会で承認された後に、発効した。この資源管理の目標は持続可能な水準で資源量を維持することであった。その後、捕獲割り当て制や複数の禁止事項が導入された。

3.1 1996 - 2000 年のシロイルカの共同管理体制

次に、1996 - 2000 年および 2001 - 2003 年のシロイルカの共同管理を紹介する。

3.1.1 捕獲頭数の割り当て制

ヌナヴィク地域ではシロイルカは、1996 年から 2000 年の春まで 5 年間、カナダ政府と地元のイヌイトによる共同管理のもとにあった。マキヴィクと漁業海洋省は 1 年間で総計約 240 頭まで捕獲しても資源の再生産は可能であろうと推定し、ヌナヴィクの村役場、狩猟・漁労・ワナ猟組合、地元のハンターと話し合い、村ごとの年間捕獲割り当て (クオータ) を決定した。ヌナヴィク地域の村ごとの捕獲割り当て頭数は、表 2 の通りである。

この表が示すとおり、1999 年の時点ではヌナヴィク地域全体で 243 頭のシロイル

表2 ヌナヴィク地域における村別の人口と年間シロイルカ捕獲割り当て頭数
(1996年開始の捕獲割り当てと2001年開始の捕獲割り当て)

村名	1996年の人口	捕獲割り当て (1996-2000) 毎年	捕獲割り当て (2001-2003) 毎年
アウバルク	159人	10頭	5頭
タシウヤック	191人	10頭	25頭
クージュアック	1726人	10頭	25頭
カンギックスアルジュアック	648人	10頭	25頭
カンギルスク	394人	0頭	25頭
クアックタック	257人	29頭	30頭
カンギックスジュアック	479人	29頭	30頭
サルイト	929人	30頭	30頭
イヴィヴィク	274人	30頭	30頭
アクリヴィク	411人	15頭	25頭
ブヴニツク	1169人	15頭	25頭
イヌクジュアック	1184人	15頭	25頭
ウミウヤック	315人	15頭	25頭
クージュアラビク	579人	15頭	25頭
合計		243頭	370頭

カの捕獲が可能とされ、各村において捕獲割り当て制が実施されていた。なお、この捕獲割り当て頭数は一種の内規ないしは目標であり、州や国による法的な制裁を伴うものではない点を強調しておきたい。ハドソン湾では各村において捕獲割り当て頭数に達した後は、7月以降はイヌクジュアック村以北の沿岸海域で捕獲しなければならないとされている。

3.1.2 シロイルカの禁猟区の設定と禁止・警告事項

1996年 - 2000年の管理体制下では、ヌナヴィクの沿岸地域にシロイルカの禁猟区が次のように設定された。ウンガヴァ湾のマカリク川 (Mucalic River) の河口はシロイルカの幼獣が成育する場所であるので、捕獲は全面的に禁止された。さらにウンガヴァ湾ではクアックタック村より以北の海域でシロイルカを捕獲しなければならないと決められた。ハドソン湾のナスタプーカ川 (Nastapoka) の河口はシロイルカの幼獣が成育する場所であるので、狩猟禁止期間が設定された。

また、禁止事項としてシロイルカの幼獣は取ってはならないとされた。さらに海獣は年を経るごとにPCBや水銀を体内に蓄積していくので、年をとったシロイルカはなるべく食べないようにとの警告がマキヴィクの調査部から出された。

3.2 2001 - 2003 年の共同管理体制

2001年の春にシロイルカ管理5カ年計画の実施が終了した。ヌナヴィクの各村、ヌナヴィク地域の狩猟・漁労・ワナ猟組合、マキヴィク、ケベック州政府、カナダ連邦政府の漁業海洋省の代表者がシロイルカの管理のあり方について協議したところ、各村の代表からシロイルカの割り当て頭数が少なすぎるとの意見が続出した。例えば、クアックタック村はこの管理体制から脱退することを表明した。新たな管理計画の確定が紛糾し、協議を重ねた結果、旧体制では1年間の捕獲割り当て頭数の総数が243頭であったものが新体制では370頭となった(表2)。

北ケベックのシロイルカ管理計画(2001 - 2003年)の概要は次の通りである。

北ケベック全域は、ウンガヴァ湾、ハドソン海峡、東部ハドソン湾の3つのゾーンへと分けられた。

北ケベックの全域には、次のような規則が適用されることになった。

1. メスの成獣と子供のシロイルカのペアは捕獲しないこと。
2. (体色が灰色である) 幼獣は捕獲しないこと。
3. 網を用いてシロイルカを捕獲しないこと。
4. 先に鉞をうってから、ライフルを使用すること。
5. しとめた獲物を村へ持ち帰ることができない場合には、捕獲しないこと。
6. マツタックや肉を無駄にしないこと。食料として利用しうるパートは分配すること。

これ以外にゾーンごとに規制が設定された。ウンガヴァ湾ゾーンは、カンギスアルジュアック、クージュアック、タシウヤック、アウパルク、カンギスクからなる。各村の年間捕獲割り当ての上限は25頭ずつである。捕獲はウンガヴァ湾ではなく、ハドソン海峡で実施することが好ましいということが決められた。さらに、ウンガヴァ湾内では8月中、マカリック河口では1年中、禁猟が決定された。

ハドソン海峡ゾーンはクアックタック、カンギスツジュアック、サルイト、イヴィヴィクの4村から構成されている。各村の年間捕獲割り当ての上限頭数は30頭ずつと定められた。

東部ハドソン湾ゾーンはアクリヴィク、ブヴニツク、イヌクジュアック、ウミウヤック、クージュアラピクの5村からなる。各村の年間捕獲割り当ての上限は25頭ずつと定められた。捕獲は主にハドソン海峡で行われるべきとされ、ナスタブーカ川とリトル・ホエール川の河口では7月中は禁猟とされた。さらに各地域での上限も設定された。ハドソン湾内の東側、ジェームズ湾内での年間最大捕獲頭数はそれぞれ30頭、

ナスタブーカ川とリトル・ホエール川での年間最大捕獲頭数はそれぞれ 15 頭と決定された。

関係政府側と資源利用者側との話し合いの結果、新計画では利用者側の要求を政府側が受け入れるかたちとなった。話し合いが決着した後も、両者の間には不満が残った。資源の利用者側であるイヌイットは捕獲頭数制限の上限がいまだに低すぎると感じている一方、政府関係者は新しい捕獲頭数制限の上限は高すぎるとの見解を持っていた。

3.3 2002 年のシロイルカの共同管理の変更

漁業海洋省は、2001 年の夏に航空調査を実施し（なお、この航空調査にはイヌイットは参加していなかったうえに、ハドソン湾東部とウングヴァ湾でそれぞれ数日の観察だけが実施されたのみであった）、ウングヴァ湾のシロイルカは 200 頭未満、ハドソン湾東部では 1200 頭しか棲息していないという結論をだした。カナダにおける絶滅の危機に瀕する動植物種の現状に関する委員会（Committee on the Status of Endangered Species in Canada、略称は COSEWIC、以下では危機委員会と呼ぶ）は、ハドソン湾東部の夏季シロイルカ・グループを「危機が迫っている」(threatened) と認定した。2001 年の捕獲レベルを保つならば、ハドソン湾東部のシロイルカ資源は 15 年以内に絶滅する可能性があるると判断され、厳格な管理が行われる必要があるとされた。そしてウングヴァ湾の夏季シロイルカ・グループを「危機に瀕している」(endangered) と認定した。「危機が迫っている」状態とは、現行の捕獲レベルが保たれると、総数が減少し、消滅の危機に瀕する状態になることを意味している。一方、「危機に瀕している」状態とは、その動物に対し十分な保護が行われなければ、絶滅するかもしれない状態をさしている。このため、2001—2003 年のシロイルカ資源管理計画が実施中であったが、2002 年の計画については科学的データをもとに大幅な変更が提案され、実施されることになった。

漁業海洋省はヌナヴィク地域の狩猟・漁労・ワナ猟組合やカティヴィク地域政府と 2、3 度の交渉の末、次のような管理計画を施行することを発表した。共同管理とはいいながら、今回の変更についてはイヌイットの意見を無視して政府によって決定が一方的になされたように見える。

- 1 ヌナヴィクの 14 村の捕獲割り当て頭数は各 15 頭と決められた。
- 2 ウングヴァ湾とハドソン湾東部での捕獲が禁止された。
- 3 ハドソン海峡とジェームズ湾での捕獲のみが認められた。
- 4 各コミュニティがシロイルカをとってよい地域と頭数は表 3 の通りである。

この表からわかるようにウングヴァ湾側ではクアックタック以北、ハドソン湾側ではアクリヴィク以北のハドソン海峡で 100 頭の捕獲と、ジェームズ湾において 110 頭の

表3 ヌナヴィク地域における村別の年間シロイルカ捕獲割り当て頭数
(2002年の共同管理体制の変更)

村名	ハドソン海峡	ジェームズ湾	北部ジェームズ湾 (Long Island)
アウバルク	5頭	10頭	0頭
タシウヤック	5頭	10頭	0頭
クージュアック	5頭	10頭	0頭
カンギックスアルジュアック	5頭	10頭	0頭
カンギルスク	15頭	0頭	0頭
クアックタック	15頭	0頭	0頭
カンギックスジュアック	15頭	0頭	0頭
サルイト	15頭	0頭	0頭
イヴィヴィク	15頭	0頭	0頭
アクリヴィク	15頭	0頭	0頭
ブヴニツク	15頭	0頭	0頭
イヌクジュアック	0頭	5頭	10頭
ウミウヤック	0頭	5頭	10頭
クージュアラピク	0頭	5頭	10頭

捕獲が承認された。しかし、ウンガヴァ湾の4村はジェームズ湾まで狩猟に行かなければならないことになるし、イヌクジュアックとウミウヤック、クージュアラピクの3村ではジェームズ湾で捕獲しなければならなくなった。ジェームズ湾は彼らのもともとの捕獲地域ではなかった。シロイルカを捕獲するための遠征には膨大な費用がかかるうえに、不慣れた環境においてシロイルカ猟に従事しなければならなくなった。

3.4 イヌイトの対応

ヌナヴィクの村々では、村人が政府の捕獲制限に賛成する者と反対する者の2つのグループに分かれた。特に、古老たちは、シロイルカの数は減っておらず、人間の活動が作り出す騒音のために、村の近くに寄ってこないだけだと主張している。さらに、ある村では中年や青年のハンターに対して「シロイルカをとらなくなると、シロイルカは人間から遠ざかり、いなくなってしまう」と繰り返し述べている。その村の古老は、村内FMラジオ放送を通して「シロイルカをとって、監獄にいこうではないか」と村人に訴えかけている。

シロイルカ資源はイヌイットにとって重要な資源であるにもかかわらず、希少な資源であるために大きな村では、一般的な分配が行われなくなりつつあり、マツタックをハンターやその親族が保持し続ける傾向が認められる。このために、同じ村に住むイヌイット間に葛藤が生じている。

また、村間でも差異がみられ、クアックタック村のように村全体で強固に政府の新方針に反対する村もあれば、将来世代にシロイルカ資源を残さなければならないとして政府の新方針にしたがった村も見られた。2002年秋のクージュアックでの聞き取り調査によれば、多くのイヌイットがシロイルカ資源を次世代に渡すためには、捕獲割り当て制の導入と実施は必要であると考えている。多くの村では将来世代のために捕獲割り当て制について同意するものの、その実施のやり方について不満が表明されている。例えば、ブヴニツック村のハンター達は、シロイルカの捕獲割り当て頭数は村の人口比に応じて決めて欲しいと発言している。一方、クージュアラピク村のハンター達は、すべての村に同数の捕獲割り当て頭数とすべきだという意見を述べている (Doidge, Adams and Burgy 2002: 4, 6-7, 8)。

さらに、捕獲割り当て制が実施されることにより、ヌナヴィク地域内のイヌイット間や、ヌナヴィクとヌナヴトのイヌイット間でシロイルカをめぐる葛藤を生み出してしまった。イヴイヴィク村やクアックタック村のイヌイットは、他の村のイヌイットが彼らの村の近くでシロイルカを捕獲し、彼らの資源をとり、かつ狩猟場にゴミを残していることに不満を表明し始めている。ヌナヴィクのイヌイットは1960年代にカナダ政府の出先機関や小学校、看護所がある村に移動し、いくつかの村で定住生活を開始した。そして1975年に「ジェームズ湾および北ケベック協定」を締結後、イヌイットは村周辺の土地にたいして所有意識を持ち始めた。村の周辺の狩猟場を自分たちの狩猟域であるとする所有意識は、特に「ジェームズ湾および北ケベック協定」の成立の影響と考えられる。イヌイットの間におけるこの土地の所有意識や領土意識の出現には、カナダ先住民のファースト・ネーションズの場合と同様に、政府と先住民との間で締結された政治協定と深く関わっているといえよう (Nadasdy 2002)。

また、同じハドソン湾東部でシロイルカを捕獲しているサニキロアック (Sanikiluaq) に住むヌナヴト準州に属するイヌイットを、ヌナヴィクのイヌイットは批判し始めている。諸権益請求問題がカナダ政府と4つの地域のイヌイットとの間で話し合われた結果、現在のイヌイットは北西準州、ヌナヴト準州、ヌナヴィク、ラブラドルの4つの地方政府に属しており、それぞれ異なる狩猟・漁労規則が適用されている。同一の回遊性海洋資源を利用している場合でもヌナヴト準州とヌナヴィクのイヌイットの間では異なる規制が実施されているのである。ハドソン湾東部ではヌナヴト準州に属するサニキロアックのイヌイットには捕獲制限が課せられていない一方、ヌナヴィクに属するイヌイットには課せられているのである。

このように同じ村のイヌイットの間、ヌナヴィクの村の間、ヌナヴィクのイヌイットとヌナヴト準州のイヌイットの間、イヌイットと政府との間に資源利用をめぐる葛藤が生じている。

2002年の事態を改善するために、ヌナヴィク・イヌイットの政治経済団体であるマキヴィクは漁業海洋省に対し、西部ハドソン湾のシロイルカ利用の可能性やジェームズ湾でのシロイルカの捕獲の困難を訴え、政治交渉し、補償金を獲得した。同年10月にマキヴィクは、その一時金を利用してヌナヴト準州のアルヴィアト (Ariviat) から5000ポンド (2265kg) のマツタックを買い取り、ウンガヴァ湾の4ヵ村とハドソン湾東岸3ヵ村、それ以外の村に住む老人世帯に配布した。今回は少量ではあるが、このような緊急措置がとられた。しかしこの対策は、事態の抜本的な解決とはならなかった。

ハドソン湾東部のシロイルカ・グループとウンガヴァ湾のシロイルカ・グループの頭数を増加させるために、ヌナヴィク・シロイルカ回復チームが2002年12月に結成され、クージュアック村において最初の会合が持たれた。このチームの構成員は、マキヴィク (1人)、狩猟・漁労・ワナ猟組合 (1人)、カティヴィク地方政府 (1人)、ヌナヴト野生動植物管理委員会 (1人)、ヌナヴト・ツングヴィク (1人)、キーワティン野生動植物委員会 (1人)、カナダ政府漁業海洋省 (2人) の各団体を代表する計8人である。彼らは、2003年春頃までに、シロイルカの資源量を回復させるための具体的な方策をとりまとめることになっている。2002年に改訂されたシロイルカの管理体制は、2003年秋まで継続される予定である。

4 ヌナヴィク地域における共同管理の問題点と提案

4.1 共同管理の問題点

1996年から2000年の秋にかけて実施されたヌナヴィクのシロイルカの捕獲割り当て制には根本的な問題があった。ヌナヴィクのイヌイットは村ごとにシロイルカの捕獲制限が課せられていることは知っているものの、個々のハンターの狩猟行動にはその制限がほとんど反映されていなかった。当時、シロイルカ資源は減少していないと主張する多くのイヌイットは、シロイルカ資源が減少しており、捕りすぎは禁物であるという政府側の見解や、捕獲割り当て制の理由を十分には理解していなかった。また、村役場が村人のシロイルカの捕獲頭数を逐一調べているわけでもなかった。例えば、1年間の捕獲頭数15頭が割り当てられているある村では、1999年の10月から11月にかけて少なくとも20頭以上のシロイルカが捕獲されていた。この頭数は国や州による法的な規制ではないため違法ではないが、共同管理の取り決めからみると、好ましいことではない。

2001年から開始された新しい管理体制は、政府関係者側の主張と資源利用者側の主張がはげしくぶつかり、前者が後者に妥協する形で決着がついた。1年間における捕獲頭数の上限が243頭から370頭へと増加したが、この頭数が妥当なものかに関しては何ら科学的な裏付けも無ければ、先住民の伝統的な生態学的知識に基づいて決定されたものでもなかった。この捕獲可能頭数の上限は、政治的な交渉の末の妥協の産物であったといえる。この捕獲割り当て頭数が決定された後でも、利用者側は捕獲頭数制限の上限に不満を持っている一方、政府関係者は新しい捕獲頭数制限の上限は高すぎるとの見解を持っていた。

さらに2001年夏に実施された漁業海洋省による航空調査の結果に基づいて、2002年には210頭へと政府主導で一方的に捕獲割り当て頭数が削減された。そしてすでに紹介したようにイヌイットが対応できないような狩猟場の制限を漁業海洋省は打ち出した。結果的に、イヌイットは漁業海洋省の提案を受け入れることになったが、イヌイットのカナダ政府に対する不信感が増大する結果となった。そして両者の間に対立を生み出したといえる。これらの事実は、ヌナヴィクにおいてシロイルカの共同管理が効果的に実施されていないことを意味している。

筆者は、共同管理において不可欠な要素の一つは、資源利用者側が主体となって積極的に管理に参加し、取り組むことであると考えている (Drolet, Reed, Breton and Berkes 1987; Pinkerton 1989)。この点が、ヌナヴィク地域におけるシロイルカの管理において欠落している側面ではないかと思う。

現在の共同管理の制度を実施する場合には、資源の現状や村ごとの捕獲頭数割り当ての意義について村人に熟知してもらう一方で、ハンター側は自分たちの意見を科学者や政府関係者側に理解してもらう必要がある。そのためには漁業海洋省やマキヴィクの調査部の調査者と狩猟・漁労・ワナ猟組合は各村で説明会や意見交換会を繰り返し実施し、相互に意見や情報を交換しながら地元からの協力を得ることが不可欠である⁸⁾。

また、資源を地域間で適正に配分し、公平に利用するためには、相互狩猟権などヌナウトとヌナヴィクの代表者による話し合いと取り決めが必要となる⁹⁾。同一の資源が地域外や外国の人々、企業によって開発や利用の対象になっている場合には、事情がさらに複雑になることはいうまでもないことであるが、当事者(利害関係者)間の対話と相互合意のみが資源開発・利用問題の解決の糸口になる。この場合、国家や地方自治体の調整者としての行政的な役割が重要となる。国家や自治体が公平性を欠く場合には、NGOや文化人類学者らの監視者としての役割が重要になるといえよう(岸上2002)。

スミスらは資源の保全 (conservation) を、「種の枯渇や生態場の悪化を防いだり、緩和したりするためにデザインされている諸実践」(Smith and Wishnie 2000: 501; 505)

であると定義している。その上で、理論的には資源や環境を保全するための好条件と悪条件を指摘している (Smith and Wishnie 2000: 505-506)。

保全をより容易にする条件

1. 制限されたもしくは、専有のアクセス (領域に関する安定した諸権利)
2. 明確なもしくは、限定された資源 (制限されたアクセスが適用可)
3. 回復力があり、急速に再生する資源
4. 実際の収穫量が、維持収量未満の場合
5. 社会的なパラメーター (小規模の集団と安定したメンバーシップ) とただ捕りを防ぐ制度 (監視と制裁)

意図的で効果的な保全が難しくなる条件

6. 地域外にある市場からの強い需要
7. 急激な人口増加
8. 極端な資源不足
9. 絶滅の危機が迫っている資源に対する適切な代替物がないこと
10. 新技術の獲得、もしくは新たな環境への移住
11. 生産を移動させることが容易であること (拡大しうる未開拓地域の存在、移動可能な資本)

ヌナヴィク地域のシロイルカ資源の共同管理は効果的に機能しているとはいいがたいが、効果的に機能している事例としてカナダ西部極北地域のイヌヴィアルイトがあげられる (岩崎 2002)。マッケンジー地域では 1973 年から、ポラーツクでは 1989 年からハンターが中心となったシロイルカの監視プログラムが実施されてきた。また、イヌヴィアルイトのハンターはシロイルカの生物学的な情報を収集することに積極的に参加してきた (Harwood, Norton, Day and Hall 2002)。これまでの調査の結果、この地域にはおよそ 32,500 頭のシロイルカが生息し、そのうちの約 200 頭が毎年、アラスカと西部極北圏で捕獲されていると推定されている (Harwood and Smith 2002: 84-85)。1 年あたりの捕獲頭数は、総数の 0.6 パーセント未満であり、過剰捕獲の心配はなく、持続的な利用が可能である (Harwood and Smith 2002: 85)¹⁰⁾。

次に、スミスらが指摘した保全の条件を利用して、シロイルカの保全の条件をヌナヴィク地域とカナダ西部極北地域との間で比較してみたい。この指摘に基づいて西部極北地域とヌナヴィク地域を比較してみたものが、次の表 4 である。比較の結果、おもしろい違いは資源量が現在豊富か欠乏状態かどうかの違いであった。

しかし、この指標で見えない事実を 1 点確認しておきたい。それは、カナダの西部極北地域においては、シロイルカの共同管理がイヌヴィアルイトの人々の積極的な

表4 西部極北地域とヌナヴィク地域における保全条件の比較

条件	西部極北地域	ヌナヴィク地域
制限されたもしくは、専有のアクセス	あり	あり
明確な、もしくは限定された資源	あり	あり
回復力があり、急速に再生する資源	あり	あり
実際の収穫量が、維持収量未満の場合	あり	なし (不明)
社会的なパラメーターとただ捕りを防ぐ制度の存在	あり	あり
地域外にある市場からの強い需要	なし	なし
急激な人口増加	あり	あり
極端な資源不足	なし	あり
絶滅の危機が迫っている資源に対する適切な代替	なし	なし
新技術の獲得もしくは新たな環境への移住	あり・なし	あり・なし
生産を移動させることが容易であること	なし	なし

参加によって実施されている点である (岩崎 2002: 56)。

このように比較すると、西部極北地域ではシロイルカの資源量が豊富であることと資源管理に先住民が積極的に参加しているが、ヌナヴィク地域ではそうではないという差異が存在していることが分かる。

4.2 ヌナヴィク地域における資源管理の可能性

資源管理とは、特定の資源を対象として何らかのやり方でコントロールしようとする試みである。資源や環境を人間から一定の距離をおいて、客体化し、観察しうる対象であるという考えに立ち、それらを保全するために、一定の境界の中に囲い込み、コントロールするという発想は、きわめて西欧的な自然観に由来している (Crandell 1993)。別な言い方をすれば、西欧社会では、人間が外から観賞することができる「手つかずの大自然」を至上のものと考えている。そしてこの考え方はアフリカの旧植民地の森林の保全など世界各地の自然保護や資源の保全に適用されてきた (市川 2002)。この考えをもとにすれば、シロイルカの数を維持し、増やすことは、ハンターがシロイルカを捕獲せず、自然のままの状態に保つことによって実現されるということになる。カナダの漁業海洋省の生物学者や官僚は、シロイルカの数を維持、増加させるためには、ハンターによる狩猟をやめさせ、手つかずの自然の状態にシロイルカをおくことが最適なやり方であると考えているようにみえる。

一方、イヌイットは異なる考え方を持っている。イヌイットやユッピートは、人間

と動物との適切な関係を維持することが、狩猟や漁労を成功させるうえで必要であると考えている (Fienu-Riordan 1983; Nuttall 1991; スチュアート 1991:121-122; Stairs and Wenzel 1992)。例えば、動物はハンターに捕られるためにハンターの前に現れるので、ハンターが見つけた動物を獲物として捕獲することはある意味でハンターの義務であると考えられている。そしてハンターが動物に対し敬意をはらい、適切な行為と態度をしめすかぎり、そのハンターの前に動物が現れつづけると考えられている。このことは、動物を捕り続けても、動物の数は減らないことを意味している。一方、ハンターが出会った動物を捕獲しなかった場合や捕獲しても動物に対し失礼な態度をとったり、不適切な行為を行ったりした場合には、動物はそのハンターの前から姿を消すと考えられている。すなわち、ハンターと動物との適切な関係が崩れると、ハンターの前に現れる動物の数は減ると考えられているのである。これらの関係を維持させようとするタブーや慣行は、広義の資源管理といえなくもないが、イヌイトやユッピートの間では、意図的に動物を管理するという考え方はなかったと考えた方がよいだろう (Fienu-Riordan 1983, 2000; 大村 1999)¹¹⁾。たしかに、最近になってイヌイトやユッピートが将来世代のためにシロイルカのとりすぎをやめ、保全することの必要性を表明し、実践し始めた (Drolet, Reed, Brenton and Berkes 1987; Zavaleta 1999; Fienu-Riordan 2000)。しかしながら西欧的な意味の「管理」は、イヌイトにとっては文化的に制度化されていなかったし、明確なイデオロギーとしても存在してこなかった。従って、西欧的な管理になじみのない人々が、管理制度に参加することは容易なことではないといえよう。

4.3 ヌナヴィク地域における共同管理形態の再検討

筆者は共同管理とは、地元住民が政府関係者とともに特定の目標を設定し、その目標を達成することができるように両者が協力して創りあげる社会制度であると考えている。しかしながら、ヌナヴィク地域の事例は共同管理というよりも明らかにカナダ政府が主導し、西欧科学に基づく一方的な管理の形態で実施してきたように思われる。建前ではイヌイトとカナダ政府が権力と責任を分担することが前提になっているが、相互の意見の合意や「伝統的な生態学的知識」と「科学的な生態学的知識」の統合は容易ではない (大村 2002b)。そしてイヌイトが共同管理に積極的に参加していないために、それは効果的に機能しているとは思えない。

広域を回遊するシロイルカのように所有者が特定できず、先住民であれば捕獲し、食料とすることができるような野生動物は、一種の共有資源、すなわちコモンズである。次に、ヌナヴィク地域のシロイルカの管理を、コモンズの管理という立場から検討し、いかなる管理体制が構築されるべきかについて考えてみたい¹²⁾。

コモンズとは、特定の個人や国家が専有している資源や空間ではなく、無主ないし

は社会の全成員がアクセスできるものである (Acheson 1989: 351)。無主の資源は社会の成員が各自の利潤を追求して無制限に利用するので、その資源は必然的に枯渇すると予想する「コモンズの悲劇」仮説が、1968年にハーディンによって提起された (Hardin 1968)。以降、多数の事例によって仮説の検証が試みられてきたが、共有資源であっても社会の成員によって管理が効果的に行われている場合もあれば、特定の個人や集団が資源を所有し、排他的に利用していても資源が枯渇してしまった事例も存在している (Feeny, Berkes, McCay, and Acheson 1990)。共有資源の管理には歴史的にも地理的にも多様な制度が存在し、それらの効果も一様ではないのである。

ベルケス (Berkes 2002) によると、コモンズ管理の問題点は、資源へのアクセス（もしくは排除）のコントロールが困難であること、さらに各利用者が他の利用者の福利を減じさせる可能性があることであるという。しかしながらこの2つの問題は、共有資源を利用しているコミュニティが外部者のアクセスを制限することや自分たちの捕獲をコントロールすることによって解決ができると主張している。そして注目すべき実践は、共同管理、すなわち資源の利用者であるコミュニティと政府が管理の権利と義務を分かち合いながら資源を管理することである。そしてベルケスは、水平的に（地理的な空間を横切って）かつ垂直的に（いろいろなレベルの組織を横切って）諸制度を結びつけることに焦点をおくアプローチを主唱している。この最も単純な事例は、地域レベルの管理と政府レベルの管理のパートナーシップである。

ベルケスのこの主張はヌナヴィク地域のシロイルカ資源の保全に適用することができる。現在、シロイルカ資源を利用しているのはイヌイットだけであり、法律的に許されているのもイヌイットだけである。シロイルカについては外部市場からの需要が存在していない。第二に、イヌイット自身が将来のために資源を保全すべきだと考えはじめており、自主規制を行うための条件がそろっている。これは共有資源を管理するためには好条件である。問題はいかなる主体が共同管理を実施し、それぞれがどのような役割を果たすべきかを確定することである。

2001年秋から2002年春にかけて共同管理体制の見直しのために、漁業海洋省が協議した団体は、マキヴィク、カティヴィク地域政府、先住民の土地を管理する土地所有会社 (Land Holding Corporation)、地域全体の狩猟・漁労・ワナ猟組合、各村の狩猟・漁労・ワナ猟組合、各村、ケベック州政府である。ここで注目すべき点は、カナダ政府のパートナーとなる先住民側の管理主体は実質的には調整委員会ではないということである。調整委員会は、漁業海洋省とイヌイットの間で話し合わせ、合意された事項を検討し、承認することを行っているにすぎず、実際の制度づくりのための交渉には参加していないのである。

本稿では捕獲割り当て頭数や規制の具体的な内容については言及しない。この理由は、科学者もイヌイットも現時点ではシロイルカの頭数を高い精度でもって推定する

ことができないからである。捕獲割り当て頭数は、試行錯誤によって、柔軟に決定すべきである。むしろ本論文では、イヌイットが積極的に共同管理に参加する管理の形態に焦点を合わせる。

ベルケス (Berkes 2002) は、管理の形態は空間を横切り、組織のレベルを横切るクロス・スケールな諸制度を連結させるという点から検討し、「ジェームズ湾および北ケベック協定」に基づく共同管理の形態を図1のように要約している。

図1を参考にしながら、現在のヌナヴィク地域におけるシロイルカの共同管理の形態をマキヴィクや地域全体の狩猟・漁労・ワナ猟組合の代表者からの聞き取り調査に基づいて描き出したのが図2である。さらにヌナウト・イヌイットやクリーとの間でシロイルカ資源の利用に関する取り決めが必要であるので、ヌナヴィク・イヌイットとそれら2者との横のつながりが必要となる。

現在の協定のもとでは、調整委員会が最終的な決定を行うことになっているが、管理計画を作成する段階で漁業海洋省とシロイルカ資源に関して協議し、かつ決定された共同管理を実施する主体が誰であるかが明確ではなく、表5で示したように複数の関係団体の集合となっている。筆者は連結構造をより単純化し、柔軟性に富む体制をとることを勧めたい。

筆者は、漁業海洋省との共同管理者を地域全体の狩猟・漁労・ワナ猟組合と各村にある狩猟・漁労・ワナ猟組合とし、それ以外のイヌイット団体はオブザーバー的なアドバイザーとした方が効果的に機能すると考えている¹³⁾。ヌナヴィク地域の資源状態を向上させるためには、イヌイットが自主的にかつ積極的に参加できるような管理制度を作り上げる必要がある。資源の保全は、利用者みずからが自主的にかつ積極的に参加し、行動規制を行わない限りは、有効に機能しない (Pinkerton 1989)。筆者は狩猟を行う当事者もしくはその代表が政府の共同管理者となるべきだと考える。管理の設定と実施を、5年程度の期限をつけて各地域のイヌイットの村や狩猟・漁労・ワナ猟組合、地域全体の狩猟・漁労・ワナ猟組合の手にゆだねてはどうかと考えている。5年という期間は、シロイルカの出産サイクルが4年あまりといわれているからである。すな

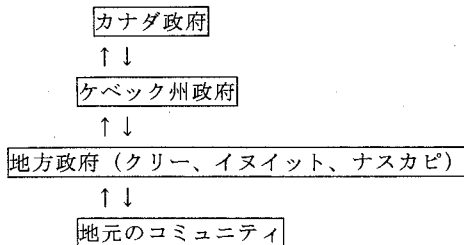


図1 「ジェームズ湾および北ケベック協定」の共同管理の形態
出典：Berkes (2002: 303)

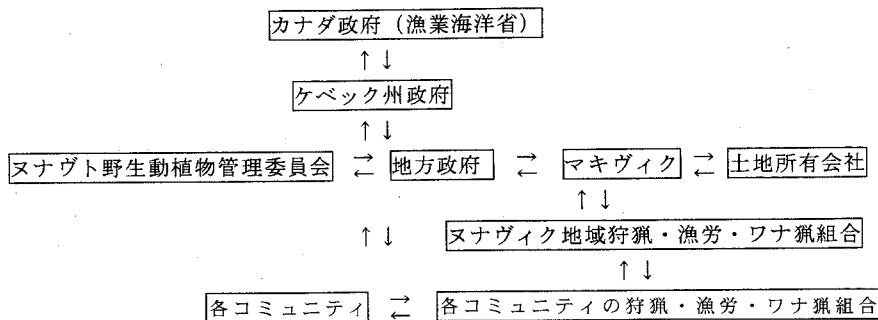


図2 ヌナヴィク地域におけるシロイルカの共同管理の形態 (2002年現在)

わち狩猟規制や捕獲割り当て頭数の設定をイヌイット自身が彼らの経験に基づいて決めるべきであると主張する。この共同管理について、管理主体と機能の点から整理したものが表5である。

筆者は、イヌイットのハンターの身体に刻み込まれた実践に基づく知識 (実践知)¹⁴⁾ や古老の判断を活用すべきだと考える。イヌイットのハンターは、特定の季節に特定の動物種だけを捕獲しようとするようなことはせず、資源量や生態条件の変化に応じて狩猟方法や数種類の獲物を臨機応変に捕獲する (Balikci 1968: 80)。彼らが、シロイルカが獲れなくなったと判断したならば、アザラシ類や魚類など他の獲物を獲り、シロイルカ猟を一時的にせよ、休止することや狩猟場所を変えるが予想される。シロイルカ猟は彼らにとっては、現在でも文化的に価値の高い食料を獲得するための活動である。シロイルカ猟からの見返りが、労働投下に対してきわめて非生産的や非効率であると体験に基づいて判断すると、彼らはシロイルカの資源量が彼らの基準で生産的・効率的である狩猟ができる程度に回復するまでは、地元でのシロイルカ猟を一時的に休止するであろうと筆者は考える。仮に実践知が特殊であったり、多様であったりしても、地元の古老に判断を仰ぐことによって意見のとりまとめはより容易になる。

カナダ政府の漁業海洋省はシロイルカを第一に生物多様性を守るために守るべき対象と考えているが、イヌイットは食料資源と考えている。異なる目的であるが、両者はシロイルカを管理しなければならないという考えを共有している。共同管理者としてのカナダ政府の役割は、村と村、地域と地域、ヌナヴィクとヌナヴトとの間での管理や葛藤に関する調整の実施と、資源状態を定期的にモニタリングする調査をイヌイットとともに実施することに限定することを筆者は提案する。漁業海洋省の生物学者は、イヌイットと協力してシロイルカ資源の分布や資源総量の確定を試み、そのうえで捕獲しても資源量が再生産可能な量を提言すべきであると考えている。

もし5年間の管理計画がうまくいけば、それを延長すればよい。もし資源量が回復しない場合や枯渇化が明らかに進展したとイヌイット自身が判断した場合には、イヌ

表5 共同管理主体の機能

	共同管理主体1	共同管理主体2	オブザーバー
団体名	地域全体および各村の狩猟・漁労・ワナ猟組合	漁業海洋省	マキヴィク、カティヴィク 地方政府、各村、調整委員会、土地所有会社
機能1	規制や捕獲割り当ての決定	規制や捕獲割り当ての決定 に関してアドバイザー機能	助言機能
機能2	調査を協力し、共同で実施する	モニター調査の共同実施 村間、地域間、ヌナウトと ヌナヴィク間の調整機能	調査の共同実施や調査に協力する

イットは政府の意見に耳を傾け、より積極的に科学者の調査や管理の実施に協力するだろう。いずれにしても現在のシロイルカの資源量が少ないとされるヌナヴィク地域において、その持続的な利用を目指すためには、イヌイットが積極的に参加できる管理制度を作り出す必要がある。そのためには1度、共同管理体制をイヌイット主体のものに変えることを筆者は提言する。

シロイルカ猟の狩猟効率をあげ、かつ狩猟の成果をより多くのイヌイットに公平に分配し、利用することができるようにするために、現行のハンター・サポート・プログラムを活用することを提案する。ハドソン湾南東部やウングアヴァ湾にある各村のイヌイットが個人個人で、ハドソン海峡やジェームズ湾にある狩猟場にシロイルカをもとめて出猟するよりも、ハンター・サポート・プログラムを利用して村がやとった、もしくは委託したハンターの集団が村全体のためにシロイルカをとりに出かけ、その成果を村全体で分配し、利用する方がより効率的であり、かつ社会的にも望ましいと考えられる。ハンターを派遣できない場合には、シロイルカを捕獲したハンターから村がハンター・サポート・プログラムを利用してシロイルカを買い取り、そのシロイルカを村の全世帯へ分配することもひとつのやり方として考えられる。この制度を利用すれば、捕獲者が各村で決まっているため各村におけるシロイルカの捕獲量をより正確にモニターすることもでき、管理の効率を上げることができると主張したい。

5 結びにかえて

ここでは、カナダ・ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の管理の状況について報告した。

シロイルカ猟など狩猟行動自体がイヌイット社会においては、人間と動物、人間と主体的環境との関係を維持するための文化的に重要な実践である。また、シロイルカ

のマツタックはイヌイットが文化的に高く評価する食べ物である。さらに、ヌナヴィク地域においては、シロイルカのマツタックや肉はハンター間、親族や他の村人へと特定の社会関係に沿って繰り返し分配されることを通して、村人意識やイヌイット意識の維持、そして既存の社会関係の再生産に貢献している。このような理由からシロイルカ資源をイヌイットが持続的に利用することは、イヌイットにとって文化的・社会的に重要なことであるといえる。しかしながら、ヌナヴィク地域周辺では、その資源が少ないとされている。

将来世代のためにシロイルカ資源をどのように管理していくかはヌナヴィク地域のイヌイットが直面している課題のひとつである。海中にありかつ移動するため資源量を推定することがきわめて困難である海洋資源の維持や増加は、人工的に資源量を増大させるよりも、人間の捕獲・利用行動を規制した方がより実践的である。この問題を解決するため、1996年より彼らはカナダ政府とともにシロイルカ資源の共同管理を実施してきた。しかし、本稿において報告してきたように、現在の共同管理は科学的な根拠にも、先住民の知識にも基づかず、両者の政治的な妥協の産物として実施されているように見えてならない。現在の管理体制は、漁業海洋省の一方的な強制のように見え、ヌナヴィク地域のイヌイットの間では効果的に機能するとは思えない。

筆者は、5年間という期限付きで、一度、イヌイットのハンターを代表する管理主体団体にシロイルカ資源の捕獲割り当て頭数と規制を決定する権限を与えることを提案する。一方、カナダ政府は仲介者として村間や地域間の資源利用の調整を行うこと、そして共同管理のパートナーとして資源の状態を定期的にモニタリングする調査をイヌイットともに実施することに力点を置くべきである。資源の管理とは試行錯誤の実践であり、その時々で臨機応変に事態に対応する必要がある。この結果、ハンターの実践知によって効果的にシロイルカ資源を管理することができれば、その管理を実施する期限を延ばせばよい。イヌイット自身の決めたことが効率的に機能しないと彼ら自身が判断した場合には、彼らは政府の言い分を受け入れ、積極的に共同管理に参画するようになるであろう。

また、資源の獲得や分配においては、現行のハンター・サポート・プログラムを活用することを提案する。

謝 辞

本研究は、国立民族学博物館の先端研究プロジェクト「先住民資源問題」のもとで実施された共同研究会「先住民による海洋資源利用と管理」(1999年度-2001年度)と「先住民による水産資源の分配と商業流通」(2002年度-2003年度)の研究成果の一部である。本論文の原稿に対し、スチュアートヘンリ先生と赤嶺淳先生、岩崎まさみ先生からご批判やコメントを頂戴

した。本論文を完成させる際に参考にさせて頂いた。記して感謝の微意を表す次第である。

注

- 1) シロイルカについては、生物学的な研究 (Born et al. 1994; Heide-Jorgensen et al. 1998; Richard, P.R. et al. 1998a, b; Hubbard et al. 1999), 考古学やエスノヒストリー研究 (Lucier and Vanstone 1995; Savelle 1995), 民俗知識 (Huntington, et al. 1999; Mymrin 1999; Doidge, Adams and Burgy 2002) や狩猟の変化 (Morseth 1997), 共同管理 (Adams et al. 1993; Richard and Pike 1993; Sejersen 2001) などについての研究が近年、盛んに行われている。また、資源の安全性の確保に係わる資源管理については本稿では取り扱わないが、シロイルカを含む海洋資源の汚染問題については、Ayotte (1995), Barrie, et al (1992), Canada (1999), Dewailly et al. (1994), Egede (1995), Kinoloch (1995), 岸上 (2002), Kuhnlein (1995), McGinn (2000), Nuttall (1998), O'Neil, Elias and Yassi (1997), Smith and McCarter (1997), Wormworth (1995) を参照されたい。
- 2) ハドソン湾会社によるハドソン湾におけるシロイルカ猟については、Francis and Morantz (1983: 142-150) を参照されたい。
- 3) シロイルカやイッカクのマツタックは、ヌナヴト準州の生協で販売されている。また、ヌナヴィクでは、ハンターがシロイルカのマツタックを村のハンター・サポート・プログラムに売ることがある。
- 4) イヌイット人口が1265人あまりのウングヴァ湾にあるクージュアック村では、1999年の初夏にある親子がカンギスク村の近くでシロイルカを2頭捕獲した。その親子はマツタックを20cm四方の大きさに切り、村の全世帯へと分配したという。また、同年、学校の狩猟実習で子どもたちがシロイルカを1頭捕獲したが、これは同村の老人がいる40世帯へ分配されたという。食物分配については岸上 (2003a, b) を参照されたい。
- 5) ハンター・サポート・プログラムとは、「ジェームズ湾および北ケベック協定」(James Bay and Northern Quebec Agreement) を締結した結果、ケベック州政府が1982年12月に法案83として制定したものである。そのプログラムの目的は、イヌイットの狩猟、漁労、ワナ猟など食料獲得活動を促進させ、長期的に維持させ、かつそのような活動から得られる産物をイヌイットに供給することを保障することであった。そのプログラム資金の運用は、ひとたび村に交付配分された後は各村に任されている。従って、村用の大型ボートや大型冷凍庫を購入したり、肉や魚を村のハンターや隣村から購入したりし、村人にそれらを無料で提供することが可能となった (岸上 1998; Kishigami 2000; Cesa 2002)。
- 6) ヌナヴィク地域のイヌイットが、どのグループに属するシロイルカを捕獲しているかを確定するために遺伝子分析が実施されている (Smith 2000a)。
- 7) 各村には、地元の狩猟・漁労・ワナ猟組合がある。ヌナヴィク全体の本部はクージュアックにある。同組合の主な役割はヌナヴィクのイヌイットに資源管理についての情報や問題点を各村のハンターたちに知らせることである。なお、同組合の決定事項は法的な権威性をもっていない。
- 8) 2002年にカティヴィク地方政府は、ハンターと科学者との間での相互コミュニケーションや相互教育が必要であると考え、ヌナヴィクのハンターを海洋漁業省ケベック事業所へ連れて行き、海洋生物学者との意見交換会が持たれた。
- 9) ヌナヴトとグリーンランドの間にもシロイルカなど鯨類について同様な問題があり、国際協定がある (Richard and Pike 1993)。

- 10) カナダの西部極北地域においてシロイルカをめぐる問題がないわけではない。混合経済のもと重要な現金収入源となる観光業とシロイルカ狩猟の間に葛藤が生じている (Dressler, Berkes and Mathias 2001)。
- 11) 先住民が資源の保全者であるかどうかに関して、人類学者の間で賛否両論が存在する。スミスとウイシュニーの「保全」の定義に従えば、アラスカ・エスキモーやカナダ・イヌイットは資源の保全を実践してきたとはいえない (Smith and Wishnie 2000: 508)。スミスらによると、先住民が獲物となる動物資源を意図的に保全してきたかどうかについては証拠が無いという (Smith and Wishnie 2000: 508)。また、意図的な保全が行われてきた対象は、植物資源が環境であるという (Smith and Wishnie 2000: 515)。
- 12) コモンズ論の展開については、井上 (2001) や家中 (2002) を参照されたい。
- 13) 「ジェームズ湾および北ケベック協定」では、陸地しか交渉の対象になっておらず、海や沿岸域の利用や管理については話し合いが行われていなかった。しかし、マキヴィクはカナダ政府と沿岸域協定 (offshore agreement) について 2003 年の 3 月に合意に達した。マキヴィクのスタシ・オルピンスキー氏によると、もしこの協定が締結されると、資源管理を目的としたヌナフト野生動物植物委員会のようなものが形成される予定であるという。
- 14) 実践知については、田辺 (2003) の序章と第 1 章を参照されたい。

文 献

Acheson, J.M.

1989 Management of Common-Property Resources. In S. Planter (ed.) *Economic Anthropology*, pp.351-378. Stanford: Stanford University Press.

Adams, M. et. al.

1993 Alaska and Inuvialuit Beluga Whale Committee (AIBWC) — An Initiative in “At Home Management” *Arctic* 46(2): 134-137.

秋道智彌

1997 「資源をめぐる相克と打開」福井勝義編 pp.165-187, 『環境の人類誌』(岩波講座 文化人類学 第 2 卷) 岩波書店。

Ayotte, P. et als.

1995 Arctic Air Pollution and Human Health: What Effects Should Be Expected? *The Science of the Total Environment*. 160/161: 529-537.

Balikci, A.

1968 The Netsilik Eskimos: Adaptive Process. In R. B. Lee and I. De Vore (eds.) *Man the Hunter*, pp. 78-82. Chicago: Aldine Publishing Co.

Barrie, L.A. et al.

1992 Arctic Contaminants: Sources, Occurrence and Pathways. *The Science of the Total Environment* 122: 1-74.

Berkes, F.

2002 Cross-Scale Institutional Linkages : Perspectives from the Bottom Up. In E. Ostrom et al (eds.) *The Drama of the Commons*, pp.293-321. Washington, D. C.: National Academy Press.

Born, E.W., R. Dietz and R. R. Reeves (eds.)

- 1994 Studies of White Whales (*Delphinapterus leucas*) and Narwhales (*Monodon monoceros*) in Greenland Adjacent Waters. *Meddelelser om Gronland: Bioscience*. 39.
- Canada
- 1999 *Summary of Northern Contaminants Program: Projects for 1999-2000*. Ottawa: Indian and Northern Affairs Canada.
- Cesa, Y.
- 2002 Échange Commercial et Usages Monétaires Non-Marchands dans le Cadre du Programme d'Aide aux Chasseurs du Nunavik. *Études/Inuit/Studies* 26(2): 175-186.
- Crandell, G.
- 1993 *Nature Pictorialised: "The View" in Landscape History*. Baltimore: John Hopkins University Press.
- Dahl, J.
- 1989 Integrative and Cultural Role of Hunting and Subsistence in Greenland. *Études/Inuit/Studies* 13(1): 23-42.
- Dewailly, E. et al.
- 1994 Exposure of Remote Maritime Populations to Coplanar PCBs. *Environmental Health Perspectives Supplements* 102(1): 205-209.
- Doidge, W., W.Adams and C. Burgy
- 2002 Traditional Ecological Knowledge of Beluga Whales in Nunavik. Interviews from Puvimittuq, Umiujaq and Kuujuaaraapik. Report 12-419 of the Nunavik Research Centre Submitted to Environment Canada's Habitat Stewardship Program for Species at Risk. Project PH-2001-2-20022. Kuujuaq, PQ: Makivik Corporation.
- Dresser, W., F. Berkes, and J. Mathias
- 2001 Beluga Hunters in a Mixed Economy: Managing the Impact of Nature-based Tourism in the Canadian western Arctic. *Polar Record* 37: 35-48.
- Drolet, C. A., A. Reed, M. Breton and F. Berkes
- 1987 Sharing Wildlife Management Responsibilities with Native Groups: Case Histories in Northern Quebec. *Transactors of the 52nd North American Wildlife and Natural Resources Conference*. pp.389-398.
- Egede, I.
- 1995 Inuit Food and Inuit Health: Contaminants in Perspective. In: *Research in the Arctic: Nutrition, Environment and Health Seminar in Nuuk - June 22-23*, pp. 1-3.
- Feeny, D., F. Berkes, B. J. McCay and J.M. Acheson
- 1990 The Tragedy of the Commons: Twenty-Two Years Later. *Human Ecology* 18(1): 1-19.
- Fienup-Riordan, A.
- 1983 *The Nelson Island Eskimo: Social Structure and Ritual Distribution*. Anchorage: Alaska Pacific University Press.
- 2000 Original Ecologists?: The Relationship between Yup'ik Eskimos and Animals. In *Eskimo Essays*, pp.167-191. New Brunswick: Rutgers University Press.
- Francis, D. and T. Morantz
- 1983 *Partners in Furs: A History of the Fur Trade in Eastern James Bay 1600-1870*. Kingston and Montreal: McGill-Queen's University Press.
- Freeman, M.M.R. et al.

- 1998 *Inuit, Whaling, and Sustainability*. Walnut, Creek: Altamira Press.
- Graves, J. and E. Hall
- 1988 *Arctic Animals*. Yellowknife: Northwest Territories Renewable Resources.
- Harwood, L. A., P. Norton, B. Day and P. A. Hall
- 2001 The Harvest of Beluga Whales in Canada's Western Arctic: Hunter-Based Monitoring of the Size and Composition of the Catch. *Arctic* 55(1): 10-20.
- Harwood, L. and T. G. Smit
- 2003 Whales of the Inuvialuit Settlement Region in Canada's Western Arctic: An Overview and Outlook. *Arctic* 55(supp. 1): 77-93.
- Heide-Jorgensen, M. P. et al.
- 1999 Dive Patterns of Beluga (*Delphinapterus leucas*) in Waters Near Eastern Devon Island. *Arctic* 51(1): 17-26.
- Hubbard, J.D., et al.
- 2000 Winter Sighting of Beluga Whales (*Delphinapterus leucas*) in Yakutat-Disenchantment Bay, Alaska. *Arctic* 52(4): 411-412.
- Hunn, E.
- 2001 Value of Subsistence in the Future of the World. In V. D. Nazarea(ed.) *Ethnoecology: Situated Knowledge/ Located Lives*, pp. 23-36. Tucson: University of Arizona press.
- Huntington, H.P. et al.
- 1999 Traditional Knowledge of the Ecology of Beluga Whales (*Delphinapterus leucas*) in the Eastern Chukchi and Northern Bering Seas, Alaska. *Arctic* 52(1): 49-61.
- 井上真
- 2002 「序章 自然資源の共同管理制度としてのコモンズ」井上真・宮内泰介編 pp.1-28, 「コモンズの社会学」東京：新曜社。
- 市川光雄
- 2003 「『地域』環境問題としての熱帯雨林破壊－中央アフリカ・カメルーンの例から－」『アジア・アフリカ地域研究』2: 292-305。
- 岩崎まさみ
- 2002 カナダ先住民による海洋資源利用と管理：カナダ西部極北地域のイヌピアロウイットとブリティッシュ・コロンビア州先住民族のケースから」岸上伸啓編 pp.49-73, 『先住民による海洋資源利用と管理』大阪：国立民族学博物館。
- Kinoloch, d. et al.
- 1991 Inuit Foods and Diet: A Preliminary Assessment of Benefits and Risks. *The Science of the Total Environment* 122: 247-278.
- 岸上伸啓
- 1998 『極北の民 カナダ・イヌイット』東京：弘文堂。
- 1999 「先住民資源論序説：資源をめぐる人類学的研究の可能性について」『人文論究』（北海道教育大学函館人文学会）68: 63-80。
- 2001 「カナダ・イヌイット社会における海洋資源の利用と管理：ヌナヴィクのシロイルカ資源の場合」『人文論究』（北海道教育大学函館人文学会）70:29-52。
- 2002 「カナダ極北地域における海洋資源の汚染問題」『国立民族学博物館研究報告』27(2): 237-282。
- 2003a 「狩猟採集民社会における食物分配」『国立民族学博物館研究報告』27(4): 725-752。

- 2003b 「狩猟採集民社会における食物分配の類型について」『民族学研究』68 (2) : 145-164.
- Kishigami, N.
- 1995 Extended Family and Food Sharing Practices among the Contemporary Netislik Inuit: A Case Study of Pelly Bay, NWT, Canada. *Journal of Hokkaido University of Education* (Social Science1-B) 45(2): 1-9.
- 2000 Contemporary Inuit Food Sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers*. (Senri Ethnological Studies No 53), pp.171-192. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Kuhnlein, H.V. et al.
- 1995 Arctic Indigenous Women Consume Greater than Acceptable Levels of Organochlorines. *Journal of Nutrition* 125 (10): 2501-2510.
- 2000 *Assessment of Dietary Benefit/Risk Inuit Communities*. Ste-Anne-de-Bellevue, PQ: Centre for Indigenous Peoples' Nutrition and Environment.
- Kwan, M.
- 2002-3 The Present State of the Contaminant Issues in the Arctic Part 1: Mercury and Human Health. *Makivik News* 63: 21-29.
- Lucier, C. and J. Vanstone
- 1993 Traditional Beluga Drives of the Inupiat of Kotzebue Sound Alaska. *Fieldiana: Anthropology*. (n. s.) No.25.
- McGinn, A.P.
- 2000 「残留性有機汚染物質と闘う」レスター・R・ブラウン編著『地球白書 2000-01』（浜中裕徳監訳）pp.131-167, 東京：ダイヤモンド社。
- Moffat, M. E. K., J. D. O'Neil and T. Y. Young
- 1994 Nutritional Patterns of Inuit in the Keewatin Region of Canada. *Arctic Medical Research* 53 (suppl. 2): 298-300.
- Morseth, C.M.
- 1996 Twentieth-Century Changes in Beluga whale Hunting and Butchering by the Kagigmiut of Buckland, Alaska. *Arctic* 50(3) : 241-255.
- Mymrin, N.I. et al.
- 1997 Traditional Knowledge of the Ecology of Beluga Whales (*Delphinapterus leucas*) in the Northern Bering Sea, Chukotka, Russia. *Arctic* 52(1): 62-70.
- Nadasdy, Paul
- 2004 Property and Aboriginal Land Claims in the Canadian Subarctic: Some Theoretical Considerations. *American Anthropologist* 104(1): 247-261.
- Nuttall, M.
- 1992 Sharing and the Ideology of Subsistence in a Greenlandic Sealing Community. *Polar Record* 27(162): 217-222.
- 1992 *Arctic Homeland: Kinship, Community and Development in Northern Greenland*. Toronto: University of Toronto Press.
- 2004 *Protecting the Arctic: Indigenous Peoples and Cultural Survival*. The Netherlands: Harwood Academic Publishers.

大村敬一

- 1999 「カナダ・イヌイトの環境認識からみた資源と開発：大地概念の変化をめぐって」北海道立北方民族博物館編『北方の開発と環境：第13回北方民族文化シンポジウム報告書』pp. 13-28, 網走：北海道立北方民族博物館。
- 2002a 「ヌナウト野生生物管理委員会における「伝統的な生態学的知識」の活用：現状と問題点」岸上伸啓編『先住民による海洋資源利用と管理』pp. 49-73, 大阪：国立民族学博物館。
- 2002b 「カナダ極北地域における知識をめぐる抗争：共同管理におけるイデオロギーの相克」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海』pp. 149-167, 京都：人文書院。
- O'Neil, J. D., B. Elias, and A. Yassi
- 1997 Poisoned Food: Cultural Resistance to the Contaminants Discourse in Nunavik. *Arctic Anthropology* 34(1): 29-40.
- Peters, E. J.
- 2000 Native People and the Environmental Regime in the James Bay and Northern Quebec Agreement. *Arctic* 52(4): 395-410.
- Pinkerton, Ervin
- 1989 Attaining Better Fisheries Management Through Co-Management: Prospect, Problem and Proposition. In E. Pinkerton (ed.) *Co-Operative Management of Local Fisheries: New Directions for Improved Management and Community Development*, pp. 135-153. Vancouver: UBC Press.
- Reeves, Randall R.
- nd. *Belugas (White Whales) in Nunavik*. Kuujuaq, P.Q.: Makivik.
- Richard, P. R. and D. G. Pike
- 1993 Small Whale Co-management in the Eastern Canadian Arctic: A Case History and Analysis. *Arctic* 46(2): 138-143.
- Richard, P.R. et. al.
- 1998a Sightings of Beluga and Other Marine Mammals in the North Water, Late March 1993. *Arctic* 51(1): 1-4.
- 1998b Fall Movements of Belugas (*Delphinapterus leucas*) with Satellite-linked Transmitters in Lancaster Sound, Jones Sound, and Northern Baffin Bay. *Arctic* 51(1): 5-16.
- Santé Québec
- 1995 *A Health Profile of the Inuit: Report of the Santé Québec Survey among the Inuit of Nunavik, 1992*. Vol.3. Diet: A Health Determining Factor. (Jetté, M. ed.) Montreal: Ministère de la Santé et des Services Sociaux, Gouvernement du Québec.
- Savelle, J. M.
- 1995 An Ethnoarchaeological Investigation of Inuit Beluga Whale and Narwhal Harvesting. In A. P. McCartney (ed.) *Hunting Large Animals*, pp.127-148. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute.
- Sejersen, F
- 2001 Hunting and Management of Beluga Whales (*Delphinapterus leuas*) In Greenland: Changing Strategies to Cope with New National and Local Interests. *Arctic* 54(4): 431-443
- Sergent, D. E.
- 1968 Whales. In C. S. Beals (ed.) *Science, History and Hudson Bay*. (Vol.1), pp. 388-396. Ottawa: Department of Energy, Mines and Resources.
- Smith, E. A. and J. McCarter (eds.)
- 1997 *Contested Arctic*. Seattle: University of Washington Press.
- Smith, E. A. and M. Wishnie

- 2000 Conservation and Subsistence in Small-Scale Societies. *Annual Reviews of Anthropology* 29: 493-524.
- Smith, T.
- 2000a *Identifying the Stocks of Belugas in Nunavik: The Role of Genetics*. Published by Makivik Corporation under the Aboriginal Fisheries Strategy Program of the Department of Fisheries and Oceans.
- 2000b *Studying the Movements and Migrations of Arctic Beluga Whales*. Published by Makivik Corporation under the Aboriginal Fisheries Strategy Program of the Department of Fisheries and Oceans.
- スチュアート ヘンリ
- 1991 「分配における男女の役割分担について—ネツリック・イヌイト社会における獲物・分配・世界観」『社会人類学年報』17:115-127。
- 田辺繁治
- 2003 『生き方の人類学：実践とは何か』東京：講談社。
- Thouez, J. P., A. Rannou and P. Foggin
- 1994 The Other Face of Development: Native Population, Health Status Indicators of Malnutrition – the Case of the Cree and Inuit of Northern Quebec. *Social Science and Medicine* 29: 965-974.
- Wein, E. E. et al.
- 1995 Use of and Preference for Traditional Foods among the Belcher Island Inuit. *Arctic* 49(3): 256-264.
- Wenzel, G.
- 1991 *Animal Rights, Human Rights*. Toronto: University of Toronto Press.
- Wormworth, J.
- 1994 Toxins and Tradition: The Impact of Food-Chain Contamination on the Inuit of Northern Quebec. *Canadian Medical Association*. 52(8): 1237-1240.
- 家中茂
- 2002 「生成するコモنز—環境社会学におけるコモنز論の展開」松井健編『開発と環境の文化学』pp.81-112, 東京：榕樹書林。
- Zavaleta, E.
- 1999 The Emergence of Waterfowl Conservation among Yup'ik Hunters in the Yukon-Kuskokwim Delta, Alaska. *Human Ecology* 27(2): 231-266.

